

連載 「変わりゆく高等教育」 第 2 回

悪魔か救世主か？

その 1 : MOOC (ムーク) の出現

a.k.a.ミンミン

はじめに

市民研通信第 50 号に寄せた「米国のエリートオンライン・全寮制大学 Minerva (ミネルヴァ)」の記事では、テクノロジーの進歩に必然的に影響され、高等教育変革の先駆けとなっている、しかし依然として米国でも例外的な存在であるひとつの小規模私立大学を紹介した。そのなかで、現在の高等教育は中世以来連綿と続いている教育の提供側の都合により伝統とされてきたモデルに呪縛され続けていることを説明した。その呪縛とは、大学(教師)側からすれば、(大学が)決めた時間に、(大学が)決めた場所に学生を物理的に集め、(大学が)決めた内容の勉強を、しばしば大教室で、受身で受講させ、(大学が)決めた時に試験を受けさせ、(大学が)単位を認めたり認めなかったり出来る、というものだ。この提供者側のいわばビジネスモデルに従って、国家や大学も教育提供環境を整えてきた。

Minerva の物理的な校舎から解放されて学びの場を世界的に展開しようとする動きとは対照的に、最近では少しでも学生に通い易くしようと、東京郊外の大学キャンパスが都心に回帰してきている。しかしこの事象は筆者には、商売に百戦錬磨の建設業者や教育コンサルタントが、都心回帰を可能にした工場等制限法の廃止に乗じて経営にウブな日本の大学人を巧く言いくるめ、金を使わせた例としか思えない。個々の大学の経営状況は詳しく見てはいないが、近い将来この都心回帰の為にいった新規投資への返済が重い負担となって、財務状況を急速に悪化させる私学が多く判明してくるだろう。そもそも、これからは学生となる子供がいないのだ。そしてそんなことは

昭和時代から危機とされていたことなのに、当時書店に少数だが発見できたまっとうな予測本は、トンデモ本のように扱われていたことをいまでも記憶している。それ以来の場当たりの対応。既に地方の大学で募集停止なんてニュースは珍しくもない。

大学が都心に帰ってきても、肝心の人口割合の圧倒的多数の大人を集められるだけの魅力ある教員や高品質のプログラムを提供できるのかは大いに疑問であると言えば良い方で、ほとんど絶望的である。それほど日本の大学や教師が、教えるということに関しては、子供相手の仕事しかしてこなかった、故に大人を扱えないからであるし（これは筆者の仕事の立場上、直接さんざん経験して痛感している）、企業も従業員の教育をアウトソース出来るなんて期待していないからである。すでにほとんどの MOT は失速、MBA も撤退した大学も何校もある。生き残っている MBA などでは、学歴ロンダリングに利用できそうな有名校でも急速に学生の質が落ちてきている、という教員の生の声を聞くことも現実に出てきたのだ。諸々の事情で継続せねばならない大学院には、教育困難大学院というのも出てくるのかもしれない。そしてヤル気ある大人も学ぶ気を失い、そこで教える教員の質も下がっていくのだろう。

これだけでも多いに危機感を持たないといけないのに、面白いのは、文部科学省の、そして日本の多くの大学の、いまだに鎖国しているようなものの見方である。ほとんどの産業が海外の競合相手と普通に戦い、差別化してきているなかで、教育だけが安泰だなんて思っただけではないのだ。実質義務教育化している高校までは、特に海外との競争は大きな脅威とはならないだろうが、今後大学教育産業は普通に海外の大学教育産業と連携し、競争し、差別化していかなければ生き残れない。例えば、きわめてドメスティックな体質であろう日本の酪農業でさえ、日欧 EPA の発効で、欧州からの安いおいしいチーズとの競争にさらされ、海外に打って出るか、国内で差別化しなければ生き残れない状況になってきている。これは政府間の取り決めの結果だが、大学教育なんて、チーズなんて物理的なもののやり取りがないので、実はそんな国家間の政治的規制をやすやすと乗り越えてしまえるのだ。まして（ここは老いた官僚や大学人には思いもよらないだろうが）、日本の学生は、日本の大学の学位を取らなきゃ就職できないだろう、などという昭和時代レベルで思考停止してはいけないのだ。

前回紹介した Minerva の学生が、一年目はアメリカ、2 年目以降は英国、ドイツ、アルゼンチン、インド、韓国、台湾、と移動しながら学んでいけることが売りのひとつであったことを思い出してほしい。そのカギとなるのはテクノロジー、この場合はインターネットを最大限に活用した学びであった。その性質上、当たり前だがインターネットには国境は（一部を除いて）ないので、学生や教師が物理的にどこにいてもあまり重要でなくなっているのである。そのうち大学がどの国にあるかなんて関係なくなってくるだろう。

この事実は世界にとって革命的なことなのである。本稿と次稿で紹介する MOOC による変革は、日

本の大学が少子高齢化の中でどう生き残るか、などというチャチなレベルの話ではなく、インターネットを最大限に活用して全世界にリーチを伸ばし、教育で世界を変えようという、鎖国日本とは全く次元の違うレベルの視点も内包する話なのである。

唐突だが、以下の[セーブ・ザ・チルドレンの広告](#)を目にしたことがあるだろうか？ 筆者は地下鉄で目にして、最近一番印象に残る広告として憶えている。

問題。サラさんは、起きている時間の半分で家の手伝いを、残りの時間の 2/3 で妹の世話をします。6 時間寝たとき、勉強は何時間できますか？ 学校へは、歩いて往復 3 時間かかるものとなります。この問題は、本当に問題です。

どこかの学習塾の広告を思い出すが、世界の 6 歳から 17 歳の子供の 6 人に 1 人にあたる 2 億 6,300 万人が、貧困や紛争、女の子だからとか、学校が近くにないとか、教員の質に問題があるなどの理由で十分な学びが得られていない、とのことだ。しかし、学校に通えて教員にも問題がないとされる場合でも、(ネットさえあれば簡単に手に入るコモディティ化された) 知識の(無意味な)暗記と、それを基本にした入学試験に向けた訓練を中心に仕込まれている子供の総数は、学校に通えない子供の総数よりも多いかもしれない。前回紹介した Minerva のように自分の頭で考えることを刺激されるような教育を受けられるのは、先進国でもまだごくごく一部だろう。

子供の教育では、高等教育に比べて学校という装置に物理的に集まる意義は依然としてあるだろうが、それでもいま学校に行くことが出来ない子供に教育を与えるため、さらにいま学校に通えている子供の教育の質をさらに良くするため、テクノロジーが寄与できる部分があることは明らかだ。まして対象者が大学生ならば、テクノロジーで代替できる部分は全く多くあるだろう(ちなみに Adult Education という研究分野が欧米にはあるのだが、そこでは「大人」は、一般にある程度の経験を蓄積した 30 歳台以降とされ、日本の大学生くらいの年齢は決して大人とはされないのだが、ここでは深入りしない)。

ここで途上国、先進国を問わず広く教育を変革すると期待されている新しい取り組み、また前稿でも紹介したが、2013 年にイノベーション学の泰斗でハーバード・ビジネススクールのクレイトン・クリステンセン教授に、「アメリカの大学の 50% は 10 年から 15 年以内に潰れる。そこには州立大学も含まれる。それが起こると思うとワクワクする」、とまで言わしめた新しい取り組み、それが MOOC なのである。

MOOC (ムーク) とは何か？

MOOC (ムーク) とは Massive Open Online Course の単語の頭の文字をつなげたもので、インターネットを介した大規模な公開オンライン講座のことである。Online Course はいいとして、

Massive (マッシイヴ) は「大規模な」とか、「大量の」とか、「広く行き渡った」、くらいの意味、また Open であるが一般には「公開」と訳されることが多いが、「無試験で入学できる」といった意味が重要である。無試験で入学できるというと、例えば日本では通信制の大学があるが、誰でも入学できるわけではなく、年齢による制限、例えば放送大学は全科履修生では大学入学資格が必要、選科・科目履修生では年度初めに満 15 歳以上などの制限がある。しかし MOOC では年齢による制限は、学位の取得などに関連する以外には原則ない。4 歳でも 10 歳でも問題ないのである。また「公開」と言っても日本の場合は、例えば放送大学のインターネット授業を「無料」で視聴できるわけではなく、まずは学費を払わないと、クラスの内容すら良くわからないのであるが、MOOC では単位なんて必要なければ、授業のビデオの視聴など無料が原則なのである。

ここが決定的に重要なのであるが、MOOC は原則的に無料か極めて廉価なのである。登録も gmail や yahoo で十分だし、仮名で登録してもかまわない（しかしそうすると後で修了証をもらうときに困るが）。無料でも講義ビデオは見放題だし、他の参加者と掲示板で議論もできる。しかし、自分の取ったコースを大学の単位に組み込んだり、履歴書に書いて転職の役にでも立てたければ、50 ドルとか 100 ドルの費用を払ってコースの修了証を「買う」仕組みなのだ。また修了証を積み重ねて学位を取ることも出来る。始める時は無料で、学ぼうちに面白くなって有料のバージョンにしてより手厚い指導を受けることもできる。ともかく、さまざまなバリエーションがあるが、伝統的形態の大学に大きなインパクトを与え始めているので、次回詳説する。

ちなみに筆者は MOOC の黎明期から多くのコースに参加してきたが（さらに登録しておきながら、ほとんど参加しなかったコースはその何倍にもなるが）、全て無料バージョンで済ませてきた。しかし、修了証など特に欲しくないだけで、実際の学びは、有料でも無料でも原則違いはない。自分にとっては、むしろ金を使わない方が、いろいろなコースをつまみ食いできるし、また一つのコースでも自分に興味がある部分だけ学ぶという気楽な態度でいるために都合がいいとさえ感じている。講義ビデオは WIFI さえあればスマホやタブレットにダウンロードできるので、それらを電車の中で見たりと、本の替わりの気楽な暇つぶしにもなっている。MOOC は完修率が低い、故に効果的でない、などという議論は、全く大人の学びをわかっておらず、学校に閉じ込めた子供への理屈（つまり出席率とかテストの平均点とか）を大人にあてはめた、全く意味のないことで、自ら子供相手の仕事しかしてこなかったことを証明している。

では MOOC とは具体的にはどんなものなのだろう。MOOC をよりよく把握するために、次の例を想像して欲しい。読者は北海道のチーズ工房である。自分で店舗も持っているが、より多くのお客に売るために、楽天にも出店している。ここでチーズが MOOC コース、チーズ工房は MOOC コースを作成する大学や研究機関、楽天が MOOC コースのプラットフォームとなる。この稿ではプラットフォームを MOOC と呼んでいくことにする。MOOC 自体は最後の C が示すようにコースなのであるが、便宜的にコースを提供するプラットフォーム、つまり楽天のような「場」を MOOC と呼んでい

くことにする（本当はコースは沢山あるので、最後の C は Courses と複数形になり、MOOCs なのだが、それは議論の本質ではないどうでもいいことなので、ここでは MOOC (ムーク) に統一していく)。

2012 年が MOOC 元年と言われているのであるが、実はそれ以前から北米や英国を中心に、特に大学での教材をネット上にアーカイブして公開し、無料で使ってもらおうという動きが起きていた。その中の一つを紹介してから、世界の主要な MOOC を見て行こう。

(以下、多くの外部サイトへのリンクを張ってあるが、読者はぜひ全てのリンク先サイトを訪れて欲しい。そうすることでどのようなコースが提供されているのか、またこれが社会にどの程度のインパクトを与えているのか、与えようとしているのかが実感できるだろう。また日本の大学生の総数が 300 万人弱であることも思い出されたい)。

MOOC 誕生前夜

MOOC は突然変異で生まれたものではなく、萌芽はその群発より 10 年以上も前に発生していた。これも一つではないのだが、ここでは最も革新的だと当時捉えられた MIT の例を挙げよう。

[MIT OpenCourseWare \(OCW\)](#)

言わずと知れたマサチューセッツ工科大学が、全ての授業をネット上に公開し、クリエイティブ・コモンズ・ライセンスのもとに利用できるようにする、と発表したのは 2001 年のことであった。それ以来、この大学は毎年授業のアーカイブを重ね、現在では 2,500 ものコースを公開し、世界中から累計 3 億人の利用者を記録している。公開する授業の内容も、初期の頃こそ限られた授業のハンドアウトとシラバス、簡単なノートだけだったのが、今や多くの授業のビデオまで撮って公開している。



MIT OCW の HP より

例えば最も人気のあるコースの一つとされる [Introduction to Computer Science and Programming in Python](#) を見てみると、シラバスやテキスト、毎回の講義ビデオ、講義で使用したスライド、Python というこの授業で使用したプログラミング言語のコード、クラス内で出した問題とそのビデオ解説、宿題、と至れり尽くせりなのである。MIT の正規の学生であれば、このコース一つあたりで何十万円もの授業料を払っているのだろうが、OCW であれば何の登録もする必要なく、4 歳であっても 10 歳であっても、無料で、いつでも好きな時に学べ、また教員であれば自分の授業の参考にすることが出来るのである。さらに OCW には中国語、スペイン語、トルコ語 コリア語に翻訳されたコースまで見つけることが出来る。

世界の誰に見られても恥ずかしくない（というのは日本的な感覚かもしれないが）だけの授業を展開しているという自信、こんな自信にあふれたコースを何千も無料で公開し、好きなように使ってくれ、と自らイニシアティブをとった MIT、そこには当然、世界の主要な研究教育機関の一つとしての威信や影響力をますます強めたいという大学の戦略もあるだろうが、それより教育の力で世界をより民主的にしたいというメッセージを発信していたのが強く印象に残っている。家の手伝いと妹の世話を明け暮れるサラさんのように生きなければならない数億人の人生を（その 1% だって 100 万人単位だ）、ネットを介して変えられる可能性がある。そして、この精神こそ MOOC 発展の原動力につながっていくのである。

MOOC の主要プレーヤー

先ず MOOC は OCW が大規模になったものではないことに注意が必要だ。OCW は伝統的な対面の教室授業をネット上にアーカイブしていつているものであるが、MOOC はインターネットにつながった

独立した学習者を想定しているので、コースの作り方が根本から違うのだ。ここにはインストラクショナル・デザイン(Instructional Design)と呼ばれる研究分野が、ネットでつながった学習者が効果的・効率的に学ぶにはどのようにしたらいいかなどを、あれこれ模索してきているのであるが、ここではあまり深入りしない。しかし実際にコースに登録し、受講してみれば、テーマを絞った短いビデオ(2~3分から長くても10分程度)の視聴の連続と、短い單元ごとの理解確認テスト(英語ではクイズと呼ぶ)が印象的であろう。航空力学コースでも、中世の魔女狩りの歴史コースでも、コースの作り方はほとんど同じなのである。

現在の MOOC の世界は寡占状態になっているので、所要なプレーヤーを見て行くことで業界の全体が把握できるようにしたい。米国からは Khan Academy, Coursera, edX, Udacity の 4 つ、欧州から FutureLearn、中国から XuetangX、また世界レベルで見ると正直どうでもいい存在だが、JM00C を日本から紹介する。一通り見ていただければ判るが、日本は質・量共に絶望的に劣っている。

[Khan Academy \(カーン・アカデミー\)](#)

今回紹介する MOOC の中では K-12 (米国の幼稚園から高校) に主軸を置いている面で他とはかなり違うが、先にあげた学校に通えないサラさんの例に一番関連しているし、また MOOC 元年とされる 2012 年に先行する 2005 年にスタートしたパイオニアであるので、まずはこれを紹介しよう。

設立者であるインド・バングラディッシュ系のアメリカ人 Sal Khan (サル・カーン) は、MIT で電子工学とコンピューターサイエンスの修士を、ハーバード・ビジネススクールで MBA を取得した秀才であるが、いとこの家庭教師として数学を教える為にビデオを作り Youtube に上げていた。するとすぐ多くの人々がビデオのわかりやすさに気がつき、チャンネルに人が集まり始めた、というところから 2005 年にスタートした MOOC である。そのようないきさつから、特に K-12 向けの数学が充実している。平たく言うと、数学はビデオ付きの公文方式である。ステップ・バイ・ステップで理解を確実にしながら進めるように工夫されている。

[Youtube の Khan Academy](#) では、チャンネル登録者数 480 万人、日本からビデオを視聴すると日本語の字幕が出てくることも多い。これは日本語字幕を作るボランティアによるものである。日本語の字幕ではなく [日本語化されたサイト](#) も存在する。さらにサイトの一番下までスクロールしていくと、左側に「言語」というプルダウンリストが出てくる。ここには 2019 年 5 月現在 29 カ国語が確認できるが、どの言語でもいいので、適当な言語の適当な章のビデオを覗いてみていただきたい。

ここで実感されるのは、数学や化学や物理といった、当たり前だが世界のどこに行っても変わらない科目はグローバルな科目は、一度優れた教材を作成してしまえば、あとは言語を替えるだけ

で世界中に流通できるということである。この単純な事実は非常に重要で、つまりは世界に何百万人いるか知らない教師の授業準備の努力や時間のほとんど全ては、過去に誰かが行ったことの重複であり、またどこかで誰かが行っていることの重複であり、世界レベルで見れば、そのほとんどは無駄なのだ。一度優れた教材が世界レベルで流通すれば、それが生き残り、ほとんど全ての教師の努力は必要なくなる。

教師が標準化された教材を使えば、行政としては財政的なコストが大幅に削減できるし、学生側からすれば世界のどこにいても画一化されてはいるが一定水準以上の品質の学習が可能になるということなのである。サラさんにすれば近くに学校が出来て通えるようになったとしても、そこで質の悪い教師に教わるよりは、ネットの教材を使った方が遥かに良い学習ができるのだ。そうすると教師はつまずいたところを助けるなどの、学習の支援者としての性質が強くなっていくだろう。先進国では教師役はTAやある程度の水準以上の学生バイトで十分だろう。またはAIを組み込んで、つまずいたところから自動的にやり直す仕組みが内蔵されれば人間の介在は必要なくなるし、車の自動運転と同じく、むしろ人間の介在のない方が、効率的・効果的に学習できるようになるだろう。人間の介在が必要なくなれば、途上国の学力は一気に上がる可能性がある。

特定の科目については、子供を学年に分けてみんな同じ速度で学習していく、という非効率・非効果極まりないモデルは、誰にとっても不幸であり、出来るだけ早く捨て去るべきだろうし、もしこれが続いたら、それこそ提供者側の理屈で、非効率・非効果な伝統的な学習が温存されているにすぎないとみるべきだろう。そして日本は他の業界と同じく、古い体質からいつまでも脱却できず、いつの間にか他国から遅れていることに気がつくのであろう。

さていよいよ「大人」も学習者に含むMOOCである。大学や大学院レベルのコースが、何千も選り取り見取りなのだが、だからといって、読者の大学時代の苦痛に満ちた？または退屈な講義を思い浮かべて、その数に辟易してもらっては困る。コースを提供している大学や研究機関にすれば、大学やそこでの研究成果を宣伝するいい場所となっているので、また将来の学生を確保するきっかけにするためにも、ある一定以上の水準以上の教員（普通は世界的なレベル）と、それなりに作りこまれたコースしか出してこないのは容易に理解できるだろう。

伝統的な大学での科目、理系だと化学、生物学、地学、物理学、数学、統計学、工学、栄養学、獣医学、医学などなどはもちろん、文学、言語学、教育学、文化人類学、社会学、経済学、経営学などなどの人文社会系の科目も、とにかく沢山あるのである。MOOCのポータルをあちこち覗いてみれば、大型書店に行ったときのように、その多様なコースの数と種類に興奮するであろう。また下手なカルチャースクールよりも興味をそそられるタイトルのコースも多く提供されている。

例えば世界最大のMOOCであるCoursera（後ほど詳説）だけでも、ほんの少し探ただけで、いく

つも面白そうなコースが見つかる。これはあくまで筆者の趣味だが、例えばスタンフォード大学の [Understanding Einstein: The Special Theory of Relativity](#) (アインシュタインを理解する: 特殊相対性理論) なんて、たぶん途中で挫折するだろうな、と思うが、無料なので気楽に始められる。また、デューク大学で提供している [Dog Emotion and Cognition](#) (犬の感情と認知) なんて、犬と暮らしている読者にはいいかもしれない。

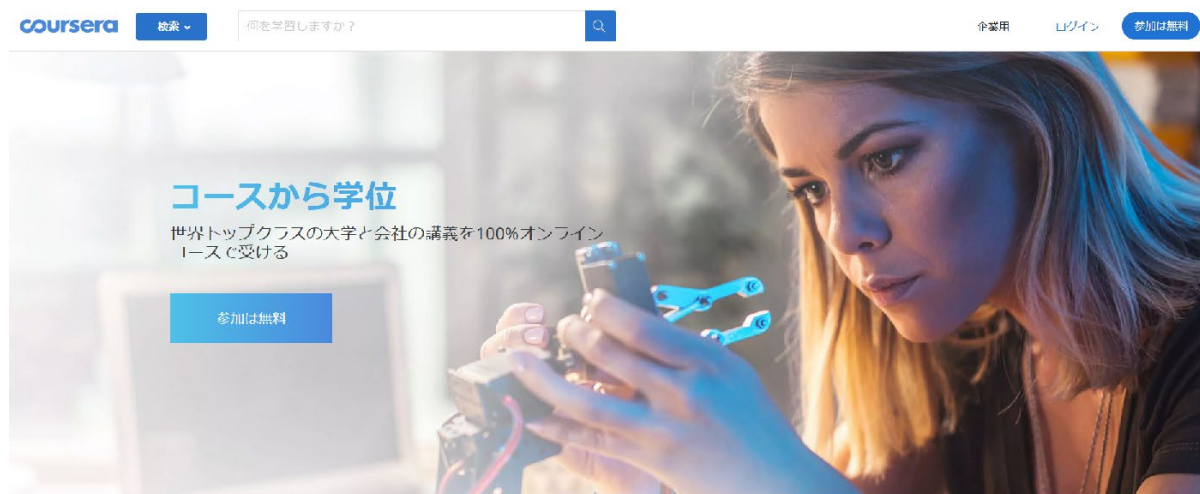
またこれは誰にでも役に立ちそうだが、ペンシルベニア大学の [Foundations of Positive Psychology](#) (ポジティブ心理学の基礎) 5 コースパックなんてどうだろう。講師はポジティブ心理学という研究分野の創始者本人である。そんな学問のパイオニアが直接コースを担当しているのだ。しかもビデオには日本語の字幕まで付いているらしい。

はたまた、もう少し趣味的なコースで、MoMA (ニューヨーク近代美術館) の [Modern Art & Ideas](#) (モダンアートとその思想) なんてどうだろう。それとも音楽は演奏できないが聴くのは好きなので、日本人のアーティストも多く卒業している Berklee College of Music (バークレー音楽大学) で [Jazz Improvisation](#) (ジャズの即興) なんて学ぶのもなかなか粋に思える。このコースの講師はなんと Gary Burton, 途中で Chick Corea など出てくる豪華なコースだ (Jazz を聴く人にしか、このすごさはわからないだろう)。

まだ経験のない読者はぜひ面白そうなコースを 1 つ 2 つ見つけて、実際に登録して、どのような登録確認のメールが来るか、一つのコースの構成がどのようになっているか、一つのビデオがどのように進行するか、各章末のテストがどのようなものか、1 週目が終わって 2 週目に行く際にどのようなメールがくるか、などなどを経験していただきたい。現在は全て英語だが、一通り行って見て、これがもし全て日本語だったら、と想像してほしい。(そしてその世界はもうすぐ現実となる。詳しくは次回)。なお以下で紹介する日本以外の受講者等の統計は [MOOC CENTRAL MOOC Report 2018](#) を参照しているので、興味ある読者は直接サイトをご覧ください。

[Coursera \(コーセラ\)](#)

スタンフォード大学のコンピューターサイエンスの教授 Daphne Koller と、中国最大の検索エンジン Daidu (百度) の AI 責任者であったことで有名で、またスタンフォード大学でも教えていた Andrew Ng により 2012 年にスタートした MOOC である。当初の科目はコンピューターサイエンス系が中心であった。現在、登録者数 3 千 700 万人は世界最大であり、43 カ国から、190 近くの大学・研究機関が、様々な分野の 3,500 以上ものコースを提供している。主要な参加大学はスタンフォード大学、エール大学、ミシガン大学、コロンビア大学、シカゴ大学、ロンドン大学、インペリアルカレッジ、などなどで、日本からは [東京大学が参加](#) している (もちろん英語のコース)。



ILLINOIS Penn JOHNS HOPKINS UNIVERSITY MICHIGAN Stanford UC San Diego Duk

Coursera の HP より

Coursera にアクセスすると、最近日本語のページが表示される。しかしいったんコースのレベルになると、全て英語になる。また中国の大学は中国語だけのコースを提供していることも多い。

[edX \(エデュエックス・エデュックス\)](#)

MIT とハーバード大学によって 2012 年にスタートした MOOC である。こちらもスタート時は MIT の Anant Agarwal 教授らによるコンピューターサイエンス系の科目から始まっている。現在、登録者数 1 千 800 万人で世界第 2 位、2,400 以上ものコースを提供している。主要な参加大学は MIT とハーバード大学はもちろん、プリンストン大学、カリフォルニア大学バークレー校、ペンシルバニア大学、カリフォルニア工科大学、オックスフォード大学などなどで、日本からは[東京大学](#)が Coursera とは違うコースを提供し、また[京都大学](#)が参加している。

edX の HP より

[Udacity \(ユダシティ\)](#)

これも 2012 年にスタートしている。Coursera や edX がいろいろのコースを、いろいろの大学から仕入れて提供しているデパートだとすれば、これは IT 系に特化した大規模専門店、ヨドバシカメラとでもいったところだろうか。登録者数 1 千万人程度。他の MOOC ではあまり提供されていない科目、例えばアンドロイドでのアプリ開発や、AI に関わるマシンラーニングやディープラーニング、また拡張現実や仮想現実、自動車の自動運転制御などの専門的な技術系の分野を体系的に学べるようになってきている。

[FutureLearn \(フューチャー・ラーン\)](#)

英国の The Open University により 2013 年スタートした MOOC で、現在の登録者数は 8 百 70 万人、主に英国系（オーストラリアなども入る）の大学がコースを提供している。日本からは[慶應義塾大学](#)が参加している。

主体となっている The Open University は世界各国の通信制大学のモデルとなっている大学であり、日本の放送大学も倣った大学である。研究機関としても知られており、放送大学と同じような存在では決してない。例えば、最近良く日本の大学関係者が気にする大学ランキング Times Higher Education (THE) World University Rankings 2019 では 501-600 位にランキングされている。これは早稲田や慶應（どちらも 601-800 位）より上位である。

[XuetangX](#)

中国版の edX である。最近の THE のランキングではアジア No1 になった清華大学が中心となり（ちなみに日本の最高位は東京大学の No8 で、No1 から No7 までは中国、香港、シンガポールの大学）、その他のコース提供校には北京大学や西安交通大学、変わったところでは人民解放軍陸軍工程大学などという大学も見受けられ、また台湾の大学も多く含まれている。[参加大学のリスト](#)を眺めてみて欲しい。

XuetangX の HP より

また [MIT](#) や [カリフォルニア大学バークレー校](#) など中国以外の大学の英語のコースを、中国語化したものも提供している。

現在、1 千 400 万人が利用し、500 以上の機関が 1,700 コースを提供している、とのことだ。

[JMOOC](#)

日本における MOOC は日本語であるという面を除いては、正直言って世界から見ればあってもなくてもどうでもいいような存在にしか過ぎない。2013 年設立の JMOOC（一般社団法人日本オープンオンライン教育推進協議会）という企業や大学をメンバーとする団体が公認するという体裁で、主に 2 つのポータル、[Gacco](#)（NTT ドコモ運営、2014 年開始）と [Fisdam](#)（富士通運営、2016 年開始）を通して、大学や企業がコースを配信するという形態になっている。

累計 140 科目以上の配信、50 万人以上が学習とのことであるが、ひと目でコースの多様性が Coursera や edX に比べて著しく劣るのが判るだろう。また筆者も実際に登録し、何科目かつまみ食いしてみたことがあるが、特に米のコースに比べて、ビデオで話している教員が「こなれて」おらず、わざわざ画面に出てくる必然性を感じないものも多い（インドの大学も同じ）。米のコースでも教員が慣れていない感じをするものはあるが、それでも全体的に訓練されている印象があり、このあたりコース作成に関わるさまざまな役割のスタッフの層の厚さがさが感じられるとともに、教員が普段の授業から自分の言葉で語り、また対話することで学生からも高評価を得なければ生き残っていけない、という経験の質の違いを感じる。

また Coursera と edX で紹介したが、日本の大学では、主なところでは東京大学と京都大学、慶應義塾大学が米英の MOOC プラットフォームを通じて英語で科目を配信している。初めから日本語しかわからない人は対象にしていないのである。また、東京大学は [MOOC](#) のみならず、MIT と同じように [OpenCourseWare](#) を また [UTokyoTV](#) で公開講座や講演会のビデオを配信している。

おわりに

さて、長々と MOOC の概略を見てきたが、繰り返しになるが読者にはぜひ 1 つか 2 つでも実際に登録して、簡単にコースの初めの 1 章だけでも受けてみて欲しい。登録しても何の義務もない、全て無料である。一見、有料そうなコースでも Audit という選択をすれば無料だ。また議論板も覗いて、出来れば Hello の一言でも書きこんでみてほしい。

筆者は仕事上、大学人や大企業の人事と話すことが多いのだが、MOOC について知っているだろう、と思われる立場の人でも知らなかったり、聞いたことがあるが実際に試したことがない、という人がほとんど全てだ。いくら日本の大学の経営や大企業の人事が素人ばかりだとはいえ、これは酷い。やっところ 1-2 年聞いたことがある、という人が増えてきた印象だが、本当は MOOC なんて知っていても、それ自体はコモディティ化された知識で何の価値もないのである。読者が実際にリンク先を訪れ、自分で実際に試していただき、そこにどんなことでもいいから何か感じていただかないと、この文章にも何の価値もないのである。

納豆については誰でも知っている。しかし、納豆を食べたことのない外国人には 100 万語を使っても、その味と粘り気を伝えることはできないだろう。しかし、一度でも食べたことのある人とは、当然どんな味か粘り気か語り合える。おいしいとか。気持ち悪いとか。これと同じことなのだが、なぜか MOOC に関しては、多くの人実際に経験したことがないのに、経験などしなくても分ったつもりになっている。知識はどうでもいい。経験が大事である。ぜひ、試していただきたい。

読者のその経験の上に、次回はいよいよ MOOC の世界の大学教育業界に与えるインパクトについて、先端的な事例を交えて見て行きたい。また伝統校がオンラインで如何にその学位の品質を担保しようとしているかも見てみたい。日本の大学に海外の動きが与えるインパクトについて記してみたい。

市民研通信 50 号に掲載の第一回目に記したが、日本の大学は 1) 世界レベルの少数の大学、2) 世界の優良大学のサテライト＝下請けとしての大学、3) 秋葉原の地下アイドル化する大学、4) 潰れる大学（は既に目に見えているが）、の 4 層に速やかに分かれてくる可能性がある。その基礎となる AI による翻訳技術の進歩も実例を交えて解説していく。また現在多くの大学が推し進める“グローバル”系の学部・学科が、さらには大学の“グローバル化”が如何に急速に陳腐化していくか、したがって失敗するか、それのみならず義務教育レベルからの英語学習が、単に子供の時間を無駄にしつつ、英語教育関係の教員・産業の利権を守る為に存在するにすぎなくなってくることを解説していく。